

論文審査の要旨および学識確認結果

報告番号	第 号	氏 名	ピネダ サンチェス、アレハンドロ フアン
論文審査担当者： 主査 慶應義塾大学・准教授 博士(工学) ホルヘ・アルマザン			
副査 慶應義塾大学・専任講師 博士(工学) 佐野 哲史			
副査 東京大学大学院・教授 博士(環境学) 岡部 明子			
副査 アリカンテ大学・教授 Ph.D (都市計画) マルティ・シリキアン、パブロ			
(論文審査の要旨)			
修士(工学)、ピネダ サンチェス、アレハンドロ フアン君提出の学位請求論文は「Identifying Community Places by Mapping Subjective Perceptions: A Case Study of Tokyo's Peripheries (主観的認識のマッピングを用いたコミュニティ空間の特定方法に関する研究：首都圏郊外を事例として)」と題し、5章からなっている。 世界中の大都市圏郊外は、新たな社会的・空間的課題に直面している。第二次世界大戦後、多くの大都市圏は急速な経済成長を遂げ、人口増加に伴い市街地が農地に侵食することで拡大した。その結果、これらの大都市圏の一つである首都圏の市街地は、明確なコミュニティ空間を持たないまま散在し、無秩序にスプロール化した都市形態へと変貌した。さらに現在、首都圏は人口減少や高齢化にも直面している。首都圏はしばしば無秩序なスプロールとみなされるが、住民がインフォーマルに使用するコミュニティ空間もある。本論文は、住民の主観的な認識を地図化することで、そうした空間を特定し、その特性を明らかにすることを目的としている。将来他国でも進行が予想される人口減少の影響に取り組む大都市圏の事例として、急速に発展した首都圏に焦点を当てる。本論文はこれらの課題に直面する2つの大都市圏周縁部におけるコミュニティ空間を地図化する。 第1章では、研究の背景、目的、意義、貢献を紹介し、論文の方法論、ケーススタディの選定、論文構成の概要を説明する。 第2章では、第二次世界大戦後の日本の首都圏の都市成長、その都市構造の形成、現在の人口減少を統計データと地図を用いて考察する。 第3章では、第1のケーススタディとして東京都調布市を取り上げ、地元のステークホルダーとの会話を引き出すための手法を開発し、コミュニティ空間として扱える彼らが愛着を感じる場所を探る。調布市はベッドタウンとみなされがちだが、地元のステークホルダーがコミュニティ空間として重要視している場所があり、特に都市農園、高架下空間、市場といったインフォーマルなコミュニティ空間が含まれている。 第4章では、神奈川県南足柄市を第2のケーススタディとして紹介し、地元のステークホルダーへのインタビューを通じて、観光地図には記載されていないが日常生活で重要な役割を果たしている場所を地図化する。これには、小さな緑地や、レストランとして改装された空き家などが含まれる。 第5章では、考察と結論を述べる。本章では、大都市圏郊外における場所の主観的な認識分析が、コミュニティ空間（主に小規模でインフォーマルかつ一見するとごく普通の集会所）の特定と、ノードや都市構造の解明という2つの目的に有効であることがわかる。また、これらのコミュニティ空間が持つ可能性と課題を考察し、特に人口減少に直面する首都圏郊外の都市再生計画においての重要な役割を考察しながら、公共交通機関へのアクセスが限られていることや、維持管理のための資源が不足しているといった課題も述べられている。東京の状況を国際的な都市研究文献と関連付けることで、コミュニティ空間を特定する方法とそれに続く考察が、世界中の他の大都市圏郊外の活性化計画策定の参考となりうることを示唆している。			
学識確認結果	学位請求論文を中心にして関連学術について上記審査会委員で試問を行い、当該学術に関し広く深い学識を有することを確認した。 また、語学（英語）についても十分な学力を有することを確認した。		